

## 第4回塩竈市総合教育会議 概要報告

1. 日 時 令和4年1月26日(水)  
開会 14時30分 閉会 15時53分
2. 会 場 壺番館第2・第3会議室(5階)
3. 出席者 塩竈市長 佐藤 光樹  
塩竈市教育委員会  
教育長 吉木 修  
教育長職務代理者 高橋 輝兆  
委員 松田 攝子  
委員 佐藤 香  
委員 菅井 信吉  
  
(事務局)  
市民総務部長 荒井 敏明  
市民総務部理事政策調整監兼政策課長 佐藤 俊幸  
教育部長 鈴木 康則  
教育部理事兼市民交流センター館長 佐藤 達也  
教育部参事兼学校教育課長 白鳥 武  
教育部教育総務課長 佐藤 聡志  
教育部生涯学習課長 鈴木 和賀子  
教育部教育総務課課長補佐兼総務係長 鈴木 亮平  
教育部教育総務課総務係主査 蜂谷 愛
4. 議 事 塩竈市教育大綱、塩竈市教育振興基本計画の策定について  
(1) 第3回塩竈市総合教育会議における指摘事項、学識経験者に対する  
意見聴取を踏まえた修正等について  
(2) その他(計画全般に関わること)
5. その他 今後のスケジュールについて

## 6. 概要

○開会

○佐藤市長あいさつ

○議事

### 塩竈市教育大綱、塩竈市教育振興基本計画の策定について

事務局から第3回塩竈市総合教育会議、学識経験者に対する意見聴取で指摘いただいた事項の確認、修正箇所について説明した後、意見交換をおこなった。

### 【主な意見】

〈松田委員〉 26ページ記載の成果指標について、この基準値の回数にはPTAが支援した運動会や学習発表会、学習参観等も含まれるのか。また、2期制になっても行事の組み換えやコミュニティスクール等で授業回数を増やし、目標値を達成するためにたくさん支援をいただきたいという指標ということではよろしいか。

〈白鳥学校教育課長〉 基準値の回数には、運動会等も基本的には含まれる。また、この指標は資料記載のとおり読み聞かせボランティア等、月1回、年間12回実施するような活動も1回としてカウントしている。ジャンルや機会を増やしていく指標と捉えていきたいと考えている。

〈高橋委員〉 19ページに記載のある成果指標のうち、国語・算数(数学)の「授業が分かる」と答えた児童生徒の割合の目標値について、小学生基準値89.5%、目標値90.0%と0.5ポイントしか差がない。8割から9割の児童・生徒が理解できていれば目標として十分なのかもしれないが、教える側の立場から考えると、ほぼ100%を目標とし、目指す方がいいのではないか。

〈白鳥学校教育課長〉 高橋委員のおっしゃる通りだと思う。しかし、例えば95%という目標値でも達成は難しいのではないかと考えていた。現状では90%が相当高いレベルだと捉えている。

〈高橋委員〉 この指標は授業が分かるかどうか聞き、分かると答えた児童生徒の割合であり、これは教える側の資質が問題になるのではないかと理解していた。教育を施す側が高い目標を掲げなければ、当然達成率は低いままとなる。これは児童生徒が努力し達成する目標値ではなく、教える側が努力し達成する目標値という意味合いで、また、10年後の目標ということでもう少し高い目標値が良いのではないかと思う。

〈松田委員〉 高橋委員の意見を聞き、その通りだと思った。教える側が努力すれば、もっと子どもたちができた、分かる、楽しいというような回答が出てくるのではないかと思う。100%の目標値は厳しいと思うので、95%の目標値がいいのではないか。

〈佐藤委員〉 分からない子どもに対し、先生がどのように努力し、アプローチしていくのかという目標と捉えると95%という目標値も分かる。しかし、その差を埋めるために先生たちは現在もすごく努力し、それでもこの結果であるということは痛いほど分かるため、90%という目標値も分かる。分からない、苦しい、という子にどうア

アプローチしていくのか考えていくべきだと思った。

〈菅井委員〉 現状 89.5%の児童が、授業が分かる」と回答しているが、かといって89.5%の児童がテストの点数が良いということではないと思う。ましてや子どもたちは自分では分かっていると言っている、テストをしてみると点数が低い子もいる。最終的には子ども達がどのくらい理解しているか、テストの結果としても見えてくると、子どもたちの気持ちと実力をいかに近づけていくかという先生方の努力の結果が数値として現れてくるのではないかと思った。また、目標値を95%と設定し、努力していくことはいいと思った。

〈佐藤市長〉 まず一つ目に、10年間の目標であるということ。二つ目に、基準値について、小学生が89.5%、中学生が83.5%と差があるのに対し、目標値はどちらも90%と同じでいいのかと感じた。他の指標の目標値設定をみても、基準値と目標値、小学生と中学生で差をつけているので、この指標についても変化をつけたほうがいいのではないか。

〈白鳥学校教育課長〉 分かる」とできる」というのは異なり、分かる」というのは、知識・理解の理解のところであり、学校教育課では9割を達成すれば十分すごいことだと判断していた。しかしご意見を聞き、小学校と中学校の基準値にこれだけ差があるため、小学校の目標値を95%と設定しても良いと思った。持ち帰り検討したい。

〈吉木教育長〉 小学校3～6年生を対象としているが、この中で教育現場では10歳の壁があると言われており、小学校4年生から5年生に上がる際、特に算数に対してはハードルが高くなる。また、ご存じのとおり中一ギャップというものがあり、小学6年生から中学1年生になると、教科の難しさがまったく変わる。そこも含めて目標値を考えていかなければいけない。しかし、各委員からご指摘のあった通り、10年間の目標値としてはもう少し高く設定しても良いと思った。しかし、中学校では教科の内容も難しくなってくることから、中学校の目標値は妥当なところかと思った。目標値を小学校は95%、中学校は90%とする考え方もあると思った。

〈佐藤市長〉 数字の設定は中々難しいところである。高すぎる目標もだめだし、かといって現在の近似値に設定してもいけない。この指標では小学校と中学校の比較で記載しており、基準値に差があるのに目標値が同じというところが高橋委員も気になったのではないかと思う。もう少し検討していただきたい。

〈松田委員〉 6ページの(1)授業づくりの文章の中で、赤字で記載してある部分は、7ページの「授業が分かる」と答えた児童生徒の割合のグラフの説明文であると思う。6ページの文章の中で、「中学校の数学では7割から8割であり、幾分低い傾向となっています。」と「幾分」という言葉を使っているが、7ページのグラフをみるとすごく差があるようにみえる。これはグラフの縦軸が70%から始まっているため、差が大きく見えるためかと思った。グラフの縦軸を0%から始まるよう修正するか、文章の中から「幾分」という言葉を外し、中学校のほうが低いと言い切ったほうがいいのではないかと思った。

〈白鳥学校教育課長〉 差を視覚的にとらえやすくしようとグラフを作成したところ、「幾分」という言葉とのずれが出てしまった。2つの選択肢をいただいたので、持ち帰り検討したい。

ここで一度10分間の休憩をはさみ、その後、引き続き意見交換を行った。

〈高橋委員〉 32ページ記載の成果指標の目標値について、満足度を100%に近づけるとあるが、30ページ記載の目標値は、満足度が基準値を上回るとある。こちらも100%に近づけるとい目標値でもいいと思ったが、この違いをお伺いしたい。

〈佐藤市民交流センター館長〉 初めに、32ページ記載の遊ホール事業満足度について、こちらは遊ホールでイベントを実施し、来場した方に対する満足度調査である。もともとそのイベントに関心のある方が参加し、そのイベントに満足したかという評価のため、当然高めの評価になる。現状でも90%を超える満足度であるため、目標値を100%と設定し、対応していくものである。それ以外の指標については、今回初めて調査した指標も多いため、どういった評価なのか内容を見定めながら、最低限、現在の基準値を上回るといことを目標として対応していきたいと考えこの目標値を設定した。

〈高橋委員〉 30ページ記載の公民館利用者満足度は利用した人が評価する満足度であると思うが、それに対し、何に満足したのか、満足しなかったのかという意見は拾っているのか。

〈鈴木生涯学習課長〉 今回初めて行った調査であるが、5つの指標で満足度を調査している。どの部分に満足していないか、満足したか、全体での満足度を聞いたうえで、それぞれ施設面の満足度、ソフト面での満足度について聞き、公民館に何が足りないか検証しようと実施した。

〈高橋委員〉 10年間という期間で、目標値が具体的な数値として記載されないと、公民館を管理している側が何の努力もしなくても良いという様に受け止められてしまう。満足度を高めるということは、職員がどれだけ努力したかということを表すものだと思える。もう少し具体的に記載できないかと思った。

〈佐藤市長〉 10年間の目標設定であるが、10年経つと施設も老朽化する。この状況だと次の段階にいくという姿勢が見えない。高齢化が相当な勢いで進んでいるため、このままでは段々状況が悪くなる。そうであれば、次の段階として、利用者に満足してもらい、利用者を増やすためにどういう努力を行政側がしていくか考えるべきである。そのことを踏まえながら、10年間という一つの基準、目標値を設定するべきだと思う。

〈鈴木生涯学習課長〉 これまで公民館で満足度調査を行っていなかったというのは課題であった。今回初めて満足度調査を行い、まずはニーズの把握と施設の課題を知ることから始めた。今までの積み重ねがないため、どこが問題だったのか検証する

ことが今回のスタートとなっている。施設の老朽化も考慮し、令和8年度までの目標、令和8年度から令和13年度までの目標というのはたたき台として事務局で作成しており、例えば公民館のように満足度が6割のところは8割まで、エスパのように8割のところは9割まで上げていこうと定めている。また、塩竈市体育館やプールは利用者の満足度しか調査していないため、利用していない人の満足度調査も行っていきたいと考えている。それぞれの審議会に図りながら、目標値を設定していきたい。

〈松田委員〉 施設の利用者数、入館者数について、市外の人か、市内の人か、どのような年代の人が利用しているのか等把握しているのか。

〈鈴木生涯学習課長〉 利用者数等は資料の巻末資料に記載している方法で調査を行っている。そのため、申請書により把握しているものは、市外・市内の方が把握できるが、数取器によるものは把握できない状況である。

〈松田委員〉 人口が減少し、子どもの数が減り、高齢者が増えてくるという状況の中で、基準値を上回るのは本当に難しいと思った。利用者数を増やすための努力は必要になってくる。どういう方々が利用しているのか把握し、さらに満足度調査を行うと、さらに有効活用できるような工夫ができるのではないかと思った。

〈菅井委員〉 32ページの成果指標のうち、「歴史の継承と文化芸術振興」の満足度について、測定方法が長期総合計画市民アンケートということで他の成果指標と対象者が異なるのかもしれないが、市民の1/4しか歴史に興味がないというのはとても寂しいと思った。何かしら具体的な事業を行い、目標値を40%、50%に設定し、塩竈のファンを増やす、親しめるような施策があっても良いのではないかと思った。

〈鈴木生涯学習課長〉 「歴史の継承と文化芸術振興」の満足度については、長期総合計画でもシビックプライドの醸成ということで力を入れている部分である。生涯学習の施策としても「塩竈学まちづくり学習事業」や子ども向けの「しおがま何でも体感団」等の取組を行い、力を入れて進めているところである。長期総合計画では、令和8年度の目標として28%と掲げており、令和8年度から令和13年度については推移を見定めて計画を策定していきたいと考えているため、長期総合計画と同じ目標としている。

〈佐藤市長〉 「歴史の継承と文化芸術振興」の満足度を上げるために、10年間、特にどういうところに力を入れていくのか。

〈鈴木生涯学習課長〉 「塩竈学」が人気のある講座である。公民館で塩竈学の講座を実施したところ、特に年配の男性から人気があり、そこで、市民向けの講座を市民が講師となって立ち上げるというところに力を入れて進めたいと考えている。講座を立ち上げることにより、受講者の中から講師を担える人材を育てて、そこからまた社会活動として広めていこうという取組を考えている。併せて、学習支援でも勝画楼の歴史等を引き続き塩竈学で取り上げていきたいと考えている。また来年度から3年間で文

化財の振興基本計画を策定しようと考えており、塩竈にある文化財の価値を再度検証し、それをつないでいく、それを観光分野にも広げていくという、門前町の、塩竈市の持っている価値を皆さんに知っていただく、それを活用していくというところに力を入れて取り組んでいく。

〈佐藤市長〉 10年間の計画である。10歳の子どもが10年経つと20歳になる。その世代に対し、どのようにアプローチしていくのか、どのように塩竈の歴史を学んでもらうか、どう継承していくか。そのような視点の取組があればお伺いしたい。

〈鈴木生涯学習課長〉 令和3年度は第一小学校で実施しているコミュニティスクールの一環として、地域の方から提案いただき、地域の方と一緒に鹽竈神社を訪問するという事業を行った。このように地域ぐるみで塩竈にある素晴らしい文化財を活用するという取組を第一小学校で進めていたので、協働本部がある生涯学習課で取りまとめながら、来年度以降も地域の方のアプローチを活かしていきたい。また総合的な学習の時間でも、浦戸の文化に触れること、各学校の4年生が鑑賞プログラムとして美術館で本物の絵を観るといったような取組を進めている。このような色々な視点を踏まえ、学校と連携し進めていきたい。

〈高橋委員〉 満足度の高いものと低いものがある。満足度の高いものを企画しているのは誰かという職員の方である。なので、その目標値が低い、あるいは基準値を上回るという程度のレベルであれば、職員は何もしないというのと同じような感覚でしか市民に伝わらない。ソフトとハードという問題はありますが、ソフトを充実させれば人が来る可能性があり、満足度は上がっていく伸びしろがあるのではないかと思います。市民目線で考えると、職員の仕事の成果がこの満足度につながるのではないかと思います。目標値が低いということは企画、立案、長期的な計画を何もしないということと同じなのではないかと感じる。具体的な数値を提示したほうが、説得力があり分かりやすいと思う。

〈鈴木部長〉 部内で議論した際、人口が減少するため基準値を上回るという目標でも適切だという話になった。しかしご意見を聞き、今後努力をしていき、さらに満足度を上げていくというのも私たちの仕事であるため、改めてこの目標値を検討させていただく。

〈松田委員〉 20ページの青色で記載されている、④2)小中学校総合的学習推進事業というのは総合的学習とは違うものなのか。

〈白鳥学校教育課長〉 内容としては総合的学習の時間に対するものである。総合的な学習の時間の中でこの事業を進めていく。

〈松田委員〉 以前の総合教育会議でも意見があった「協同的な学び」の漢字の部分であるが、6ページの下から2行目に「協同的な学び」学びとあり、18ページの中段にも「協同的な学び」と記載がある。文科省の資料や学習指導要領を見ると、「協働的な

学び」と記載してあり、コミュニティスクールのような協働推進事業のように、同じ目的のために力を合わせて働くということで学びの中でもこのような文言が使われているので、「協働」に統一してはどうかと思った。

〈白鳥学校教育課長〉 以前意見をいただいた際に課で検討し、使い分けていきたいと考えていた。「協同」という漢字を多く使用しているが、これは私たちが理論として継承している佐藤学先生の「学びの共同体による授業づくり」とう考えを尊重し、学び合いという部分では「協同」という漢字を使用するよう使い分けしている。「協働」については、社会や社会学習、文科省の引用等に使用している。例えば18ページ上段2行目では、指導要領や文科省からの引用として「協働」を使用している。また、「学びの共同体」という固有名詞は、共同体という組織として「共同」という漢字を使用している。このように3つの漢字を使い分けている。

〈吉木教育長〉 文科省で出した新しい指導要領では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を示している。個別最適な学びは個に応じた指導、それと共に協働的な学びとして子どもたちが話し合いを行うような学びの二つを示している。文科省でも新しい指導要領をはっきりと示す前までは、「協働（同）」と記載していたが、新しい指導要領を示した際には「協働」で統一された。学校教育課長から説明があった通り、塩竈市としては東京大学名誉教授の佐藤学先生の考えのもと、「学びの共同体」を中心に授業を進めているため、「協同」という漢字を使用している。このように、塩竈市として「協働的な学び」という場合は「協同」という漢字を使用し、それ以外は「協働」を使用しようと部の中で整理した。

〈佐藤市長〉 新年度から第6次長期総合計画が始まる。塩竈の10年間の方向を見据えた計画に沿ってスタートとなる重要な年となる。第2期塩竈市教育振興基本計画ということで今後10年間どういう方向性で塩竈市の子どもたちを育てていくかという重要な視点だと思っている。ただし、臨機応変に計画を変えていく必要があると思っている。以前は10年間で一つの計画としていたが、現在は5年、5年、あるいは3年、3年、4年と細分化して目標を立てていくという状況になり始めている。長期総合計画も10年の計画であるが、塩竈市も5年、5年という形を見て、時代の変化に合わせてどう変化させていくかということ、常に臨機応変に対応させていただきたいと考えている。計画よりも現場が大事だと考えている。計画に縛られすぎて本質を間違えないようにしたいと感じている。

#### ○その他

##### 今後のスケジュールについて

塩竈市教育大綱、第2期塩竈市教育振興基本計画の策定に係る今後のスケジュールについて、報告を行った。

#### ○閉会